

カテゴリ3（No55~No77）

再開・開始・（再）獲得

仕事・趣味・役割など

訪問リハ事例		No.55	自殺企図が強かったが精神的支援、家族の協力により意欲的になった	
事例	57歳女性・くも膜下出血・脳梗塞右片麻痺・運動性失語・ゲルストマン症候群・失行 生活歴：学童保育、書道教室 本人希望：以前のような生活を取り戻したい		経過	仕事中にくも膜下出血発症、入院中に脳梗塞を発症。回復期病院経由し自宅退院。入院時よりうつ症状あり。障害受容困難で閉鎖的となり、訪問リハ開始。

開始時の状態と活動・参加	実現したい生活目標（予後予測）	アプローチ後の活動・参加
屋内外の歩行は見守り。日常生活行為は失行あり一部介助、見守りを要す。精神的な落ち込みが強く、泣いて過ごされる。日常生活のリズムが崩れ、トイレや食事以外は部屋で寝て過ごされる。服薬困難。自殺企図あり。家族の見守りが必要な状況。	・復職したい ・家族や友達と話ができるようになりたい ・買い物や家事を行えるようになりたい	訪問開始から約3年。障害への悲観は続くが、物事を前向きに捉え日常を送られる。現在週5日午前のみ作業所で就労。午後近所の娘宅へ行き孫の面倒をみる。家事は掃除、洗濯、料理等全般、時間を要するが行っている。買い物は近所の八百屋やパン屋に1人で行く。自身の障害への理解、知識を深める為、研修会に自ら参加される。友人との食事会も1人で参加できるようになった。娘や家族との外出も近頃は増えている。
	リハアプローチ内容	
	○訪問リハ（ST週1回） 失語症訓練、環境調整、服薬管理、生活助言、精神的支援 ○失語症友の会紹介 ○通所リハ（半日）紹介 ○就労継続支援B型事業の作業所を紹介、連携、状況確認	
強み評価		
・真面目で集中力がある。 ・きれい好き、家事が好き。 ・仕事熱心である。 ・夫、娘が協力的。		

まとめ	自宅退院後、うつ症状が強く訓練は精神的支援が開始当初は中心であった。本人と1つ1つ確認、相談をしながら、日常生活の立て直しを図った。家族の献身的な支えもあり、時間の経過とともに生活が落ち着いてきた。また失語症友の会や作業所を通し、「できる事」が増え日常生活への自信に繋がった。現在、家事や作業所、リハへ意欲的に取り組まれている。	分類 3
-----	--	---------

訪問リハ事例		No.56	うつ状態から興味ある活動を引き出し就労へと繋がった	
事例	51歳男性・要介護2・左被殻出血右肩麻痺・感覚性失語・めまい 生活歴：自営トラックで工具の訪問販売 本人の希望：外出して人と交流したい。働きたい		経過	回復期病院で経鼻経管栄養から経口摂取となる。文レベルでの聞き誤りがある。発症後ストレスでうつ病もあり。ADL向上を目指し、訪問リハ開始。
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加
屋内歩行は独歩、自宅内でのADLは自立しているが、失語症とうつによって活動性が低下して訪問リハを休むこともあった。また、1/4半盲や常にめまいがあり受診以外は一人で外出する事は殆どなかった。		・友人と温泉旅行に行く ・趣味のバンドが行える ・就労して収入を得たり、人と交流が図れる		うつ状態も落ち着き、自転車やバスを使用して外出自立。求人や職場の情報収集を本人が行い、履歴書も作成し、障害についての説明をした上で採用。釣り具屋で週4回のパート勤務開始。友人と日帰りの温泉旅行にも行っている。仕事に伴いリハ終了（約2年間）。 
強み評価		リハアプローチ内容		
・就労の意欲があり・几帳面 ・辛抱強い・自己分析ができる ・温泉が好きでバイクや写真、バンドが趣味で仲間がいる。		○訪問リハ（週3回） ・屋外歩行にて写真撮影や買い物等、興味のある活動を引き出す。 ・言語訓練を行い理解力の向上とスムーズなコミュニケーションの向上を図る。 （回数を段階的に週3回⇒週1回へ変更） ・就労支援として障害者相談センターに同行して身体・精神機能などの情報提供・共有をする。		
まとめ	開始時はうつだったが徐々に表情も明るくなった。特に興味・趣味からの介入が心情変化のきっかけになった。就労継続支援から開始する事を提案したが、本人の意思が強く一般雇用から就職活動を開始し見事に就労へ至った。これは本人の性格の強みにより勝ち取れた結果と考える。現在も休むこと無く仕事を続けている。			分類 3

訪問リハ事例		No.57	就労支援事業所での交流により言語能力が向上		
事例	66歳男性・要介護2・左脳梗塞右肩麻痺・失語症 生活歴：伊勢丹勤務、トヨタカローラ子会社勤務 本人希望：言いたい事をはっきり言いたい		経過	心筋梗塞、脳梗塞発症後、急性期・回復期病院へ入院後、自宅へ退院。 発症から1年後、通所介護開始。 発症から3年後、訪問リハ開始。	
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加	
ADLは自立。家庭では、自ら話す事は殆どなく、頷きや首振りでの返答が主で、孫の名前も呼べなかった。 週3回短時間通所リハに通う以外は、殆ど外出はしていなかった。		就労支援事業所での就労を続けていき、家族以外の方との交流を深めていきたい。		STによるリハを始めてから、自宅での発話量が増え、現在では孫の名前も自然に出てきて、一緒に遊べるようになった。就労施設にて、他利用者からの積極的なコミュニケーションが増えた事で、自宅でも短文レベルでの発話が増えた。失語症の方特有の一本調子の平板化した発話ではなく、抑揚が自然につけられるようになった。	
		リハアプローチ内容			
強み評価		○訪問リハ（ST週1回） ・聴いて話す練習を中心に行う。 ・開始3か月、宿題で読解プリントを行なう。 ・6か月頃より、就労支援施設での就労を勧め、施設見学に同行。 ○就労支援施設 ・3回の実習の後、翌月からリハ以外の週2回、妻の送迎にて通っている。			
・几帳面でまじめ・手先が器用（模型作り、日用大工） ・家族やペットに囲まれて生活					
まとめ	入院中～退院直後は、STリハに対し後向きだったが、発症から3年経ち自らの希望で訪問リハを始めた。訪問リハ開始から5か月程経過し、就労支援を開始。作業は性格に合った物だった。コミュニケーション場面が増えた事で、発話量が増え、表情も明るくなった。現在は、訪問リハを週1回行いながら、週2回の就労を継続。社会での役割ができ、日常生活にも活気が出て、発話にも自信がついた様子。				分類 3

訪問リハ事例		No.58	農作業を行うことで、作業自立度が上がり早く目標が達成できた	
事例	61歳男性・要支援2・脳梗塞左片麻痺 生活歴：農家。子供3人（一人は小学生） 本人希望：はしごに昇って農作業したい。		経過	H〇.4月脳梗塞発症。8月自宅退院。当院外来リハ利用開始。10月より「はしごに昇って農作業したい」と希望し、訪問リハ開始。
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加
左片麻痺軽度。左上肢の自動拳上範囲は胸まで。左手握力6kg。屋外歩行には短下肢装具が必要。リンゴ畑を家族で営農。右手で軽作業のみ実施。退院時、AT限定免許に変更。近所へ買い物に出かけている。		人手不足で親類・近所に援助されている現状から家族のみで農作業が完結できるよう、農作業の7～8割が自立できる。		リンゴの収穫は不十分ながら実施。収穫後の選果作業は約20kgの木箱の運搬も含めほぼ全て自力で行えた。徐々に機能向上し、3月の左手握力18kg。はしごで両手を使った選定作業ができた。自らの能力を考慮し、農地を8反から5反に減らしたが、農作業の9割は実施できる自信がついた。3月末で訪問リハの提供を終了。
		リハアプローチ内容		
強み評価		・屋内用脚立を改良、収穫作業の自立度を上げた ・農作業への左手の使用を指導 ・左上肢機能向上練習の指導 ・内容を書面で渡し、継続実施を促がした。 		
・子供のために働かなければという強い気持ちがある ・リハに積極的 ・敷地内に平坦な農園がある				
まとめ	訪問リハ開始時期がリンゴの収穫を控えた農作業の最繁忙期であったことが特徴であった。左上肢機能の向上が見込めたので、不十分であってもその時の能力に合わせて両手動作を指導し、労働力として農作業させた。機能向上のため必要なプログラムは書面で提供し、実施を促した。機能の向上に合わせてプログラムを3回更新した。「子供のため」と強いモチベーションがあり、予想より早く目標を達成できた。			
	分類 3			

訪問リハ事例		No.59	脳梗塞後に通勤、パソコンの練習により就労に繋がった	
事例	48歳男性・要支援2・脳梗塞左片麻痺 生活歴：退院後も職場は山道通勤必要で退職 本人希望：復職したい		経過	発症後、急性期病院、回復期病院を経て自宅退院。1人暮らしなので、IADLの自立と復職に向けた活動を支援する目的で訪問リハ開始。
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加
屋内はフリーハンド、屋外はロフトストランド杖歩行。歩行時短下肢装具装着。入浴以外ADL自立も動作拙劣なところや注意力不足な面も見られた。昼食は宅配弁当で他食は近くのコンビニエンスストアに買いに行く。アパート3階に居住で、杖は紐付けて背中に背負って昇降、麻痺側手は実用レベルではない。		・公共交通手段の利用を含め、IADLが自立できるようにする。 ・パソコン習得し事務的な仕事に就く		屋外歩行では、支柱付き靴型装具に慣れるよう訓練を進める。バスや電車では、小銭ではなくカードを利用する、ロフトストランド杖ではバスの中で邪魔になるためT字杖に変更する等その都度問題解決するようにし公共交通手段での外出も問題なくできるようになった。復職に関してはハローワークに通い、パソコン教室に通えるようになったが、障害者枠少なく簡単には就職できなかった。最終的に病院事務職の復職が決まり、訪問リハ終了となった。
		リハアプローチ内容		
		○訪問リハ（週1回） ・IADLとして買物、バス・電車の昇降訓練を実施。問題点を明確にして対応。 ・屋外歩行が増え復職を見据えて支柱付き靴型具を作製。 ・本や雑貨が多く部屋が一杯→社会復帰の一環として部屋の整理計画を取り入れる。 ・パソコン操作に対して手指・上肢へのリハアプローチを増やす。		
強み評価				
非常に行動的であり復職に向けて自発的に活動していける				
まとめ	一人暮らしでADL・IADL自立だけでなく若年で復職が必須となっていた。歩行能力改善してきてハローワークに通うことや就職説明会に積極的に参加できるようになった。これは、並行して屋外用の装具の評価・作製やパソコン操作に向けた訓練が復職に繋げる一助にもなった。また就職面接時に部屋の煩雑さが顔や心に現れると考え、部屋の整理整頓を取り入れたOTの提案は適切なアプローチであったと思う。			

訪問リハ事例		No.60	『趣味活動の再開』を目標としてから、意欲が高まり能力が向上した	
事例	83歳男性・要介護3・肺動脈塞栓症・IgG関連疾患 生活歴：定年退職後、町内会長を務める 本人希望：車の運転（家族は反対）、ゴルフ		経過	肺塞栓発症後、入院した急性期病院から直接自宅へ退院。安静臥床期間があり、廃用症候群を認める。ケアマネより依頼があり、訪問看護週1回、訪問リハ開始。

開始時の状態と活動・参加	実現したい生活目標（予後予測）	アプローチ後の活動・参加
屋内T字杖歩行、屋外は短距離は可能も長距離は車イスで移動。階段昇降は軽度介助。易疲労性でSpO ₂ の低下と頻脈の出現がある。町内会長の職務は副会長に委託し、必要に応じて電話で対応。	・車の運転の再開。 ・ゴルフ（練習場での練習）	介入から2ヶ月後より週2回の訪問とする。身体機能・体力共に回復され、半年後にはゴルフの素振りの練習を行えるまで回復。更に2か月後にIgG関連疾患の影響でCRP高値となり2か月間入院。退院後、町内会長は辞退され町内会の相談役となる。退院から3か月後にゴルフ素振りを再開できるまで回復。練習場へ行くことを目標に現在も訪問リハを継続している。SpO ₂ の低下と頻脈の出現は徐々に観察されなくなっている。
強み評価 ・認知機能問題なし ・車を運転したい ・ゴルフを再開したい。 ・家族が協力的（妻がPT）	リハアプローチ内容 ○訪問リハ（週1回→週2回） ・呼吸ex、歩行ex、応用歩行ex、生活助言、自主トレ指導、ゴルフ（素振り）練習 ○訪問看護（週1回） ・服薬管理 ○家族 ・町内会の集会への付き添い ・自主トレの見守り 	

まとめ	肺塞栓を発症する前よりIgG関連疾患に罹患されていた。そのため介入期間中に熱発を繰り返しており、廃用症候群の改善が思うように進まなかった。家族は運転に強く反対しており、『なんの為にリハビリをする必要があるのか？』と本人の気持ちの落ち込みが観察された。退職後の趣味であったゴルフ（素振り）を用いることでリハを継続する目的意識を持つことができ、『練習場へ行きたい』という目標を本人が定めることが可能となった。身体機能の回復を正確に伝え、運転の再開も視野に入れている。	分類 3
-----	---	---------

訪問リハ事例		No.61	寝たきりからADL向上し、趣味活動を再開した	
事例	84歳女性・要介護2・脊椎椎間板炎・胸髄損傷・痙性対麻痺 生活歴：元小学校教員 本人希望：好きなことをして過ごしたい		経過	H22.9頸部腫瘤切除術、Th10以下対麻痺・膀胱直腸障害。同12月より訪問看護、訪問リハ開始。
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加
ベッド上寝たきり、バルーンカテーテル留置、ADL全介助より開始。自身の身体など全く興味関心を示さず全て受け身。他者との交流は訪問スタッフと家族家政婦のみ。動けなくても困らず 		・移乗が自分でできる ・自宅でラジオを聴いたり編み物をして自分らしく過ごす リハアプローチ内容 ○訪問リハ（PT週2回）機能訓練、基本動作 移乗移動練習、生活動作指導、家族・家政婦への介助方法指導 ○車椅子での外出・買い物練習 ○自宅庭での果実収穫  		車椅子レベルの離床に2年半ほど、歩行レベルでの生活に4年ほど要した。自宅内歩行自立に伴い寝室と居室空間の移動が日課となった。余暇活動として以前行っていた新聞スクラップや好きな歌手の歌番組を観るなど少しずつ楽しむことを助言。また元々趣味であった編み物でマフラーなどを作成するなど趣味活動が定着した。 
強み評価				
・介護のマンパワーがある ・意欲はなかったがリハ拒否なし ・複数の趣味があった				
まとめ	自身の身体に全く興味関心を示さず全てにおいて受け身姿勢のためアプローチに難渋した事例であった。日常生活の中でできるADLを少しずつ増やし家族や家政婦の協力のもと、生活動作の定着化を図っていった。離床時間・余暇活動として以前趣味としていた編み物を提案し日課となった。作成した作品はケアマネ経由で寄付するなど社会とのつながりも持てた。			
				分類 3

訪問リハ事例		No.62	趣味の畑仕事やテニスクラブに則したプログラムで目標獲得		
事例	67歳男性・要介護3・脳梗塞左片麻痺・高次脳機能障害 生活歴：畑仕事、ランニング、テニスが趣味 本人希望：畑仕事をしたい、テニスクラブ行きたい		経過	急性期、回復期を経て自宅退院。急性期では自分のことは自分でという気持ちが強く、1人でトイレに行こうとして注意される。能力向上を目的に訪問リハ開始。	
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加	
屋内は4点杖歩行、屋外はT字杖歩行。歩行時短下肢装具装着。ADL自立。1人で外出は注意力と下肢耐久性に問題があり難しい。畑までは800m、妻は車運転できず本人セニアカーを使って行くと主張も、麻痺と注意力↓で無理と説得。		・畑まで歩いて往復できるようになる ・テニスクラブに参加して、簡単なショートラリーができるようになる		空き地を利用して屋外歩行練習、畑まで一緒に歩く、本人が日課で散歩をするなどして、1人で畑まで行けるようになった。 テニスに関しては、移動範囲は数メートルとしてショートラリーができることを目標にした。妻の協力を得て自宅前道路で実践練習も行う。最終的には(後方に介助者が見守る) 1人でボールを返せるレベルまで上達した。テニスクラブに妻と行って実際にラリーできたことで訪問リハは終了とした。	
		リハアプローチ内容			
		○訪問リハ(週2回) 歩行能力獲得を主眼に実施。セニアカーを使うことでテニスも歩きも進歩しない旨伝え、目標を共有する。バランスやステップ練習にテニスの素振りを取り入れ、麻痺側への重心移動、修正能力を養う。自主トレを上手く活用。			
強み評価					
・努力家で負けず嫌い ・目標に向い、諦めずに頑張る ・畑仕事、テニスが大好き。					
まとめ	本人の負けず嫌いで最後まで頑張る、真面目なところが良い結果に結びついた事例である。ただ、退院直後は気持ちが先走ってしまったことや障害の受容が上手くできていないところもあって思うようにリハが進まない時もあった。歩容の改善が難しい中、テニスの目標を共有してテニスの練習を通して下肢の動作訓練ができことが、畑仕事だけでなくテニスクラブでのテニス参加に繋げることができた要因と思う。				分類 3

訪問リハ事例		No.63	農作業と買い物を夫と協力してすすめ、海外へ行くまで目標が高まった	
事例	89歳女性・レビー小体型認知症 生活歴：20頃嫁いってから農作業に従事 本人希望：夫と畑をする		経過	3年前に発症。ADL自立していたが、徐々に認知症進行し、閉じこもり傾向に。食生活も乱れ、食欲減退し、一時体重30kg前半となり、訪問看護・リハ開始。
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加
屋外歩行（外出）は受診時のみ。1本杖で歩けるが軽介助。ADLでは、下衣操作介助や、両上肢に著明な振戦が生じていることで、食事介助が必要。入浴も週2回訪問入浴。		・農作業を再開できる ・夫や息子と買い物にいく ・里の様子を見に帰る		訪問開始から約3か月で訪問リハ週2回にサービス減らし、現在は下衣操作自立。閉じこもり傾向にあったが、夫と二人で買い物へバスを利用して行かれるようになっている。また、農作業の手伝いも季節ごとに作業内容異なるが、徐々に再開できている。 
強み評価		リハアプローチ内容		
・人の役に立ちたい ・孫がいる外国へ行きたい ・農作業の知識がある ・夫が元気で家事をしてくれる		○訪問リハ（週2回） ・屋内外歩行練習 ・ADL、IADL動作練習 ・服薬管理 ・農作業の手伝い ・食事評価、促し 		
まとめ	介入当初より、積極的に屋外へ出ては農作業の手伝いや、洗濯物干し、掃除をする等といったこれまでの人生経験を活かした作業を、できにくい箇所はアドバイスしながら再開してきた。買い物へも夫と2人で行くこともでき、今後はさらに高い目標である、外国にいる孫に会いに行きたいという気持ちを大切に、したいことが達成できるようアプローチ継続している。 			分類 3

訪問リハ事例		No.64	大好きなコーラスをプログラムに入れ、外部活動へと繋がった		
事例	80代女性・要介護2・左片麻痺・腰椎圧迫骨折・生活歴：専業主婦、栄養士 本人希望：しっかり歩けるようになりたい。コーラス活動がしたい。 家族希望：転ばないようにしてほしい		経過	加齢とケガ・病気の影響で自宅に閉じこもりがちになる。屋外移動能力が低下し、介助が必要となり。訪問リハ開始。	
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加	
屋内は車椅子自走自立。屋外は車椅子介助。ADLは入浴以外自立。訪問介護を利用し独居生活はなんとか維持出来ている。近所つき合いも減り、活動性が低い生活となっていた。		コーラスグループでの活動の再開		日中、時々ピアノを弾くようになり、介入中の歌唱活動で声量が大きくなった。 近所の方の協力で月1回、本人宅に数人集まりコーラスグループを行う事になる。	
		リハアプローチ内容			
		○訪問リハ（週3日PT2回、OT1回） ・歌唱能力、ピアノ能力の評価 ・歌唱やピアノと結びつく機会提供 ・車椅子での屋外散歩で近所の方と交流 ・訪問リハで歌唱やピアノ等行っていることを近所の方にアピール ・車椅子でも外出ができ、交流が持てることを本人へフィードバック			
強み評価					
・社交的でおしゃべりが上手 ・歌を歌え、曲も多く知っている ・ピアノを弾ける。 近所の方が親切。					
まとめ	生活歴・作業歴を参考に現在の関心が明確になった。協力的な近所の方を巻き込むことでコーラス活動の定期開催へと繋がった。				分類 3

訪問リハ事例		No.65	高次脳機能障害支援センターとの連携により職場復帰に繋がった	
事例	51歳男性・要介護2・両被殻出血・高次脳機能障害・失語症 生活歴：事務関係の仕事・妻・義母・小学生の長男との4人暮らし 本人希望：外に出たい 職場復帰		経過	50歳で発症。6ヶ月の入院リハ後、自宅退院。自宅内生活の安定・復職を目的に訪問リハ介入。外来リハ、通所介護、訪問介護、高次脳機能障害支援センターが支援機関。
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加
屋内車いす移動自立。入浴に介助必要。高次脳機能障害あり、1人での外出困難も、外に出ようとして玄関で転倒歴有。社会交流は通所介護での交流程度。家庭での役割なし。		・段階的に職場復帰が出来る		・通所介護卒業（自宅で入浴可能） ・週3回の復職を果たした（職場が遠方の為、移動は家人送迎→電車、バス乗継練習が必要） ・地域コミュニティバスを1人で利用できるようになった ・家庭内役割の獲得（働き手としての父親役割、回覧版回せるようになった）
強み評価		リハアプローチ内容		
・職場の理解がある（家族経営であり、復職時期や障害を理解する姿勢） ・年齢が若い ・真面目な性格		○訪問リハ（週1回） ROMex、入浴練習、屋外歩行、就労訓練（パソコン、バス乗降、職場での動作と環境の助言）。高次脳機能障害支援センターを通し、職場、外来と連携。通所介護、訪問介護ともパソコンや		
まとめ	職場復帰という明確な目標があり、かつ職場が寛容で協力的な姿勢があった事で、支援者間での連携がスムーズに可能であった。また、比較的若年である事から、高次脳機能障害が有っても、反復学習による技能習得が可能であった。職場までの移動自立に向けたバスと電車の乗継など、交通機関の直接練習が出来ていない点が制限があった所。			
				分類 3

訪問リハ事例		No.66	妻の協力のもと住職復帰に向かって能力向上に繋がった	
事例	52歳男・要介護2・くも膜下出血左片麻痺 生活歴：住職 本人希望：復職		経過	くも膜下出血発症。破裂性椎骨動脈解離の診断で椎骨動脈塞栓術を受ける。発症約9か月後回復期病院に転院でリハ継続。発症10か月後退院。退院4か月後訪問リハ開始。
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加
移動は屋内外車椅子自走。入浴は週2回の通所リハにて入られる。トイレは不安定ながらも自立。自宅ではほとんどベッド上で過ごされる。お寺の仕事は妻が行うので助言している。地域の活動（第九等）には積極的に参加する（妻同行）。		・本堂と自宅間（屋外坂道）を歩いて移動できる ・自分で車を運転して檀家を回る（葬儀、法事等）		※現在も訪問リハ（週2回）を継続中。 移動は車椅子を卒業し、ノルディックポールにて屋外歩行可能レベルになった。本堂までの移動は未だ出来ないが、買い物や地域の活動には歩いて行けるようになった。妻の運転で檀家を回り、葬儀・法事をこなす件数が増えてきた。
強み評価		リハアプローチ内容		
・好きなことには積極的 ・車をまた運転したい ・社交的		○訪問リハ（週2回） ・ROMex ・筋トレ（特に体幹） ・歩行練習（歩行器、ノルディックポール） ・段差昇降 ・正座の練習		
まとめ	明確な目標があるにも関わらず、リハに対しては消極的だったので、車椅子を卒業するまで時間がかかった。積極的に参加される地域の活動に歩行器やノルディックポールを持って行き、そこで妻の見守りのもと歩行練習を行うよう促した結果、歩行能力の向上に繋がった。			
				分類 3

訪問リハ事例		No.67	重度の深部感覚障害を持ちながらも畑作業が可能となった		
事例	78歳女性・要介護2・胸髄症・腰部脊柱管狭窄症 生活歴：家事全般、車の運転、畑作業 本人希望：畑に出たい、車の運転をしたい		経過	椎弓切除術施行。術後経過良好であったが、入院中に症状悪化しADL低下見られる。環境調整し、約3か月後に退院。訪問リハ開始。	
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加	
屋内歩行は、ピックアップウォーカーにて近位監視レベル。重度の深部感覚障害により後方・側方への転倒が多い。その他ADLは夫の介助を要す。		・好きな時間に畑に行き作業をする ・台所に立ち、作業が行える		自ら屋外へ移動できるようになり、庭の草取りや畑作業が行えるようになった。表情も明るく、自信がついたと話すことが増えた。	
		リハアプローチ内容			
強み評価		○訪問リハ（週3回） ・基本動作訓練、促通、歩行訓練、動作練習、畑作業 ○自主訓練指導（基本動作を中心に）		 	
・ガーデニング、農業が好き ・世話好き ・信頼できる夫がいる		 			
まとめ	退院後、受傷前の生活とのギャップを受容できておらず、精神的にも不安定な状況だった。本人の希望に沿えるよう、環境調整や動作指導を行うことで早期より監視下での畑作業が可能となり、本人の自信に繋がった。リスクを考慮しながらも、本人のレベルに合わせた作業を提案し、早期に実践的できたことでその他の家事動作や生活動作の質の向上にも繋がり、満足度の高い生活を送ることが出来たのではないかと考える。				分類3

訪問リハ事例		No.68	構音訓練に対し、リハを行い趣味であったカラオケを再開できた	
事例	81歳男性・要介護2・進行性核上性麻痺（構音障害、嚥下障害、高次脳機能障害） 生活歴：農家、趣味はカラオケ 希望：(本人)カラオケがしたい(妻)夫婦で話したい		経過	進行性核上性麻痺発症し、4年後より動作の緩慢さ、歩行能力低下、声量低下が出現。6年後より家族の希望でPTによる訪問リハを週3回開始。7年後よりSTによる訪問リハ開始。
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加
発話量が減少し、声かけに頷きで応じることが多い為、夫婦での会話が減少した。声量が乏しく、妻が聞き取れない事もある。昔購入したカラオケの機械は、テレビとの接続方法を忘れたため使用できず片付けている。		・自宅でカラオケを楽しめるようになる。 ・友人や近所の人とカラオケを通じた交流が出来るようになる。		自宅での余暇活動が増加し、夫婦で歌うことがある。通所介護でのレクリエーションでカラオケをする時に複数の人の中에서도楽しく歌うことが出来ている。妻より、「前より言うことが分かる」と発言があった。 
強み評価		リハアプローチ内容		
・どの課題にも熱心に取り組む。 ・家族の協力のもと自主訓練を行える。 ・カラオケが好き。		○訪問リハ（ST 週2回） バイタル・内服・排便確認、胸郭ストレッチ、口腔体操、発声訓練、音読訓練、学習療法、自由会話 ○余暇活動 カラオケ ○その他 嚥下機能評価 		
まとめ		訪問リハ開始時は声量低下や発声持続時間の短縮が著しく、発話量が減少し、問いかけには頷きや首振りで応じることが多かった。しかし、現在はリハ中の発話量が増加し、夫婦間でも会話をする機会が増加している。また、カラオケを通して昔のことを思い出したり、余暇活動が増えたことで精神機能の賦活にもつながっていると考えられる。一方で、発動性が低く、必要がなければ自発的に話すことが少ないため、今後は精神機能へのアプローチも必要であると思われる。		

訪問リハ事例		No.69	脊髄損傷がありながらも農作業が再開出来た		
事例	60代後半男性・要介護3・脊髄損傷 生活歴：田んぼ・畑仕事 本人希望：歩けるようになりたい		経過	歩行不可となり受診。脊髄損傷にて入院し、椎弓拡大術施行。一時尿閉となり導尿するも約1か月後には不要となった。約5か月後退院し、訪問リハ開始。	
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加	
端坐位ふらつき、歩行器にて歩行可能。疲労に伴い膝折れ、右下肢の運動麻痺が強く、車いすで移動できるが、入浴ができない 歩けない姿を見てほしくないため、地域へのイベントは参加しない		・竹細工など、座ってする作業ができる ・納屋への移動自立し、作業できる ・田んぼへ行き、助言、管理ができる		入浴動作が可能となったため、通所介護終了。屋内から屋外活動が増え、納屋の整理、農機具のメンテナンスができるようになり、発症より翌年、自身でコンバインを運転し、稲刈りができるようになった。車椅子の利用も減り、杖歩行、車椅子を押して移動する。	
強み評価		リハアプローチ内容			
・前向き ・リハの意欲が非常に高い ・手先が大変器用 ・誰に対してもやさしい ・社交的		訪問リハ（週2回） ・ストレッチング ・筋トレ ・ADL練習 ・歩行練習 ・自主ト提案			
		 		 	
まとめ	非常にリハに対する意欲が高く、自主練習に励まれ、予想以上に回復された。よくなっていることを実感し、できることが増えることで自信がつき回復スピードが増進したと考える。一方で、一部自信過剰な面もみられたため、無理なことをされないか不安なこともあった。歩行ができるようになったが、杖について歩く姿を見られたくないため、地域でのイベントには参加されないため、歩容安定を今後目指す。				分類 3

訪問リハ事例		No.70	退院直後からの介入で円滑に以前の生活に戻る事が出来た	
事例	62歳女性・要介護3・第3腰椎圧迫骨折・多発性脳梗塞・右視床出血・パーキンソン症候群 生活歴：家事の一部実施 本人希望：できることは自分でしたい		経過	転倒による圧迫骨折で入院。入院中にADL低下したことで退院後の生活に不安があり、退院直後より訪問リハ開始。
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加
起居動作自立、立ち上がり動作は軽介助。自宅内歩行は歩行器および伝い歩きでの見守りか、手引きでの介助歩行。排泄はポータブルトイレ軽介助～見守り。通所介護週4回利用。家庭での役割は無く、居間で1日中テレビ鑑賞をして過ごす。		・転倒することなく移動できる ・掃除や皿洗いなどの家事を獲得する		3ヶ月で訪問リハ卒業。歩行器や伝いで歩行が安定しポータブルトイレでの排泄が自立。床掃除や皿洗いなどの家事ができるようになり家庭での役割を獲得した。さらに、自宅や通所介護での自主体操が継続でき、運動習慣が身についた。
		リハアプローチ内容 ○訪問リハ（週2回） ・床上動作、歩行、家事動作、自主体操の練習（全て夫へ指導。歩行・自主体操練習は通所介護へも依頼） ○環境調整：動線へ手すり等の支持物を追加配置		
強み評価				 
まとめ	排泄時の動線は伝い歩きになることから、支持物を追加配置し安全性を確保した結果、排泄が自立できた。家事に意欲的であったことから家事支援を積極的にすすめた。入院前までしていた皿洗いに加え、入院前にしていなかった床掃除まで実施できるようになった。また、夫や通所介護スタッフの協力のおかげで自主体操による運動習慣が身につき、入院前より活動的な生活が送れるようになった。			分類 3

訪問リハ事例		No.71	水墨画の作品展へ出展できるようになった		
事例	70歳女性・要介護2・脳出血左肩麻痺 生活歴：主婦、裁縫や書道が趣味 本人希望：しっかり歩けるようになりたい		経過	発症後、急性期、回復期を経て退院。書道ができなくなったため、水墨画の絵画教室へ通い始める。病状に対しての不安の訴えが強く、歩行時のふらつきの軽減のために訪問リハ開始。	
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加	
自宅内T字杖歩行、ADL動作見守りレベル（入浴軽介助）。屋外T字杖歩行は50m程で麻痺側足部のすり足が強まり、倒れそうになる（軽介助）。絵画教室は週1回参加され、送り迎えは夫が車の送迎、車椅子介助にて行う。		・家で身の回りのことを安全に行いたい。 ・安全に屋外歩行ができるようになりたい。 ・絵画教室の参加を楽しみたい。		自宅内T字杖歩行、ADL動作時のふらつきが軽減し、屋外T字杖歩行が立ち止まっての休憩を挟みながらであれば200m程行えるようになった。 絵画は座位での良肢位保持において、姿勢の傾きや集中力の低下が起こらない時間内で実施。それを何回も繰り返す中で、作品展へ出品させる作品を完成させることができた。 作品展の会場へは教室の仲間とバスで行き帰りすることができた。	
強み評価		リハアプローチ内容			
・やりたいことは集中して行える ・細かい所へ目が届く ・手作業が好き ・他者との交流が好き		○訪問リハ（週1回） ・基本動作練習、ADL動作練習、セルフケアの指導、屋外T字杖歩行練習、階段昇降練習、夫への介助方法・声かけの指導			
		○絵画の練習 ・椅子座位での良肢位保持の方法を指導、休息のタイミングや姿勢直しの自己管理の方法を確認			
まとめ	不安があるとすぐに投げ出してしまいそうな性格であった為、一つ一つの取り組みが身体に対して良い変化を起こすことを説明し、実感して頂くことでセルフケアとしての定着を促せた。絵画教室の参加が意欲の向上に繋がり、絵画の上達を介してリハにも積極的に取り組めるようになった。現在は絵画教室以外にも、地域の健康教室にも通われるようになっている。				分類 3

訪問リハ事例		No.72	早期の転倒対策から調理練習に至るまで		
事例	80歳女性・要支援2・パーキンソン病 生活歴：家事全般、園芸、琴 本人希望：転倒せずに生活したい		経過	腰椎圧迫骨折となり、入院。その頃から徐々に歩きにくくなる。転倒を繰り返すようになり、最初の骨折より2年後パーキンソン病と診断され訪問リハ開始。	
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加	
すくみ足・小刻み歩行などの症状から転倒を繰り返しており、以前できていた食事の準備などもできなくなった。転倒への恐怖から、床をいざって移動している状態で、日中は何もせずに低活動となっていた。		・転倒の回数が少なくなる。 ・食事を温めたり、簡単な調理ができる。		早期に環境調整を行うことで、転倒回数は軽減した。本人からうどんを作りたいと意欲も見られ、実際に調理練習も行うことができた。その際に、作った物の運搬が困難という課題もあったが、家族に依頼してワゴンも作成してもらい、安全に自室まで運ぶことが可能となった。	
		リハアプローチ内容			
		○訪問リハ（週1回、OT・PT隔週） ・転倒予防練習、調理練習、環境調整、福祉用具の選定			
強み評価		○通所介護(週1回) ・歩行練習 ・入浴介助 ・交流の場の提供			
・コミュニケーション良好 ・上肢機能は問題なし ・元々、多趣味であった ・長男夫婦と同居					
まとめ	介入前は、ベッドのみ用意された状態で自宅内で転倒を繰り返していた。介入後、本人・家族、多職種の強みを把握して早期に環境調整や動作練習できたことが、転倒の回数の軽減となった。課題が解決すると、本人の意欲が出て調理練習まで行うことができた。今後も、症状の変化に応じた環境調整や調理活動の獲得に向けて現在も介入中。				分類 3

訪問リハ事例		No.73	臥床生活から主婦業や社会的交流の再開に繋がった		
事例	83歳女性・要介護2・右大腿骨転子部骨折(γネイル術後)・糖尿病・高血圧 生活歴:夫と2人暮らし。家事や畑作業を行っていた。友人との交流も多かった。趣味は畑、お茶飲み。		経過	自宅庭で転倒。右大腿骨転子部骨折受傷し入院。受傷前より活動量や認知機能の低下あり。自宅退院後も臥床して過ごす事が多かった。退院後、訪問リハ開始。	
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加	
・歩行は屋内外T字杖使用し修正自立。ADL自立。 ・臥床して過ごす事多く、家事は殆ど行わず。 ・受傷前より活動量低下、物盗られ妄想等あり近所付き合いが減っていた。開始時も近所付き合いは無し。薬の飲み忘れも多くあり。		・転倒無く生活できる・内服が確実に行える ・主婦としての役割再開 ・社会的交流の再開（近所の友人等）		転倒無く生活。調理等の家事は自力で出来るようになり習慣化した。買い物も夫や娘の協力を得て週1、2回行くようになる。近所付き合いも再開でき、活動や参加が広がった。薬の飲み忘れも殆ど無くなった。	
		リハアプローチ内容			
		○訪問リハ(週2回) ROM訓練、筋力増強訓練、立位訓練、IADL訓練、外出訓練、環境調整、服薬管理等  ○通所介護(週2回) 体操、認知機能訓練、他者との交流等			
強み評価					
・社交的で明るい ・前向き思考 ・夫や娘、ご近所の方が協力的					
まとめ	服薬管理は環境や認知機能、本人の意識の部分に働きかけ、飲み忘れはほとんど無くなった。また主婦の役割として調理に着目。調理をきっかけに買い物へ行く等、他の生活行為へ良い波及が見られた。ご近所の友人との交流再開も療法士が促したり、実際に一緒に行く事でお誘いがある様になる。家族や近所の方の協力もあり、お茶飲み再開でき、交流の再開に繋がった。訪問開始3カ月で終了となる。				分類 3

訪問リハ事例		No.74	FSHDによる障害をもちながら役割を持って自宅生活を継続		
事例	77歳男性・顔面肩甲骨上腕型ジストロフィー・腰痛症・糖尿病 生活歴：中卒後数回の転職を経て73歳まで就労 本人希望：状態を維持、自宅で生活し続けたい		経過	数年前より、徐々に上肢の筋力低下が見られ、ADL全般に見守り・介助が必要となる。今後も自宅生活を送る為、訪問リハ開始。	
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加	
・屋内歩行は独歩(手すりの設置有)、屋外歩行はT字杖使用し歩行可能も耐久性は低い。 ・上肢の筋力低下がみられ、ADLにおいて一部支援が必要。 ・近所で買い物をしたり、病院受診で外出することはあるが、頻度は多くない。		出来る限り現状維持、自宅生活を送りたい		週1回の訪問リハから始め疼痛の改善がみられたので週2回に増やす。自主エクササイズの助言を行い、積極的に取り組まれている。 ADLにおいて一部介助が必要であるが自分で出来る事は頼ることなく行っている。 家庭内での役割分担があり、出来る範囲内で行っている。	
		リハアプローチ内容			
		○訪問リハ(週2回) バイタルチェック、関節可動域訓練、筋力維持・強化訓練、ストレッチ、起居動作訓練、IADL練習、歩行練習、生活助言 ○自主エクササイズ 適切な運動量の助言 チェック表による実施状況の把握			
強み評価					
・性格が明るく、努力家 ・家族の協力がある ・自宅が住みやすい ・近所に息子が暮らしている					
まとめ	努力家で自主エクササイズも積極的に取り組んでいる。家族の協力もあり、介助が必要なこともあるが自分で出来る事は行えている。今後、廃用性筋力低下のみならず過用性筋力低下にも注意が必要で再度運動量を提案し、ADLにおいても適切に行っていく。症状の進行も予測されるため、主治医・ケアマネ等の関連サービス機関とも密接に連携し、充実した自宅生活が送れるよう支援していく。				分類 3

訪問リハ事例		No.75	腰椎圧迫骨折後、カラオケを目的に活動範囲の拡大を図れた		
事例	88歳男性・要介護2・妻息子と3人暮らし・腰椎圧迫骨折・高血圧症 生活歴：散歩やカラオケを実施 本人希望：痛みなく動けるようになりたい		経過	X年11月より腰痛出現、腰椎圧迫骨折にてコルセット処方、安静指示を受ける。痛み減少せず身体機能低下した為、1年2月後、訪問リハ開始	
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加	
食事・トイレ・訪問入浴（週2日）時以外はほぼ臥床状態。特殊寝台、昇降座椅子をレンタルし、寝室から食卓までは歩行車を使用し移動は自立。受診（2ヵ月に1度）以外の外出はない。		車で外出できるようになる（息子の運転） カラオケの再開 自宅での入浴再開		腰痛軽減し、洗面所での洗顔が可能。シャワー浴可能、訪問入浴利用を中止。通所介護の利用開始（週2日）となり、他者との関わりが生じ、利用時の様子を訪問セラピストにもお話しされるようになる。さらに、屋外用の歩行器をレンタルし、屋外歩行練習を開始、近所のカラオケに行けるように現在練習中。	
		リハアプローチ内容			
強み評価		環境調整（ベッド・歩行車の高さ調節）、起居・移動動作指導、腰部への負担軽減を図った。無理ない範囲で自主トレを指導。住宅改修を行い自宅で入浴できる環境を整えた。			
・活動的で、社交的 ・妻は家事全般を実施 ・息子は介護に協力的					
まとめ	腰椎圧迫骨折後、活動量減少し身体機能低下していたが、環境調整や動作指導、自主トレ指導を通じて活動範囲を拡大することができた。本人が意欲的だったことに加え、家族やケアマネジャーとも連携を図り、腰痛の軽減や身体機能向上に合わせて自宅での入浴や、通所介護の利用を開始することで、さらに意欲的になり目標を高く持てるようになった。				分類 3

訪問リハ事例		No.76	コミュニケーション環境を整え、趣味活動が再開できた	
事例	70歳代男性・介護2・脳出血右片麻痺・失語症 生活歴：趣味のゴルフを楽しんでいた 本人家族の希望：喋れるようになりたい		経過	脳出血発症、2ヶ月後に回復期リハ病棟にてリハ継続。6ヶ月後、自宅退院。ADLは自立したが、中等度の失語症は残存。失語症の機能改善・活動参加を目的に通所リハ訪問リハ開始
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加
妻とのコミュニケーションが難しく、簡単な内容も理解できず、何にでも頷いてしまうことが多かった。ADLは自立できており、飼っている猫の世話をしたり、自宅周辺を妻と散歩したりしていた。		ゴルフ練習場でのゴルフを再開できる（受付手続きも一人で行える）		中等度の失語症は変わらないが、短文レベルでの聞き取り能力向上、Yes-No反応の信頼度上昇、相手のことばを使つての表出が増えたことで、疎通性が改善。妻とは日常での意思疎通で伝わらないことがなくなった。ゴルフ練習場の受付も、会話補助シートを使用し一人で利用が可能となった。 
		リハアプローチ内容		
強み評価		・失語症へのアプローチ（理解練習・発語練習・書字練習、自主トレ） ・コミュニケーション能力獲得練習（代償手段の導入、家族を交えての会話練習） ・家族の障害理解促進（失語症について、本人の障害について） ・ゴルフクラブでの素振り練習 ・一緒にゴルフ練習場でボールを打つ、受付スタッフとの調整、会話補助シート導入		
・失語症があっても社交的。 ・「ゴルフをまたやりたい」という目標もあり ・自宅から歩いてすぐに、通っていたゴルフ練習場がある。				
まとめ				
ゴルフ練習場でのゴルフを再開できるためにも、コミュニケーション能力の向上は重要であり、訪問・通所リハのSTと協力し、失語症への機能改善を図りつつ、コミュニケーション能力の獲得を妻と一緒に練習していった。また、何度もゴルフ練習場に一緒に行き、ボールが打てることを実感してもらい、受付の手続きを一人で行えるよう、練習場スタッフに状況を説明し、会話補助シートを導入できたことが成功のポイントと考える。活動参加においても、心身機能・構造や環境因子へのバランスのとれたアプローチが重要。		分類 3		

訪問リハ事例		No.77	代打オレ -草野球の試合出場が実現した-		
事例	70代男性・要介護1・脳梗塞左片麻痺・左半側空間無視 生活歴：宗教団体支部長、大家族 趣味：野球 本人希望：趣味を続けたい。 家族希望：もっと動いてほしい。		経過	H26に脳梗塞発症。回復期リハ病院を経て、築100年を経過する広大な自宅環境への再適応、趣味活動の再開を視野に、訪問リハ開始。仕事は相談役となり、3次活動の時間が延長。	
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）		アプローチ後の活動・参加	
屋内歩行は独歩も左側への追突、左足部のつまづき残存。外は車通り多く、要見守り。更衣・洗体は一部支援。家族は動いてほしいが、危険な事はしてほしくないという思いが強い。 		・孫と一緒に野球の練習をする ・野球の試合に監督⇒代打⇒守備で出場		毎回の場面見学とリスクの上限設定を明確にしたことにより、家族の安心感が得られ、非利き手のグローブのプレゼントや孫とのキャッチボール等の協力が得られた。守備に着くことはできなかったが、何試合か代打での出場を果たし、連盟の大会で初優勝を飾ることができた。    	
強み評価		リハアプローチ内容			
・野球歴60年でチームの監督 ・広大な庭（道具も充実） ・多くの孫が小～高校で野球部 ・PCで調べ物可（探究心有）		○訪問リハ（週2回） ・屋内環境整備 ・ADL訓練、家族指導 ・野球動作確認 ⇒動画撮影 ⇒フィードバック ⇒課題への自主訓練提供			
まとめ	左上肢麻痺は弱みとして正確に捉え、如何にコントロールするかを本人と話し合い、自身での解決策の探索に至った。人・物的環境の強みを活かし、現実的な方法の提供とリスク管理の揭示、場面のアピールにより、家族の協力が積極的に得られた。孫との共通趣味での交流、活動への意欲の拡大が野球を通して図られた事例である。				分類 3